

# 考古調査士への 招待



# 考古調査士資格 とは

過去の人々が残した遺跡・遺構・遺物など、地中に埋蔵されている文化財を「埋蔵文化財」と呼びますが、その調査には遺跡発掘に関わる調査・記録技術や安全対策、衛生管理などの管理技術、考古学的な専門知識など様々な知識と技術が必要です。また、調査成果を的確に報告書にまとめあげる知識と技能も重要です。さらに近年では、それらを社会に向けて発信し、地域の歴史として地域住民に還元することが大切な任務になってきました。

埋蔵文化財の調査と保存・活用に関する技術と知識は、専門的な領域に属し、一朝一夕で修得できるものではありません。大学で、長期の時間と費用を費やして修得するものです。また社会での実務経験も必要です。

考古調査士資格とは、そのような長年にわたる埋蔵文化財関係の訓練を積んだ人に対して、与えられる専門資格です。ただし、弁護士や医師のような国家資格ではなく、民間組織が発行する資格であり、独占的な資格ではありません。大学などの教育機関で、考古学を専門に勉強した学生や、あらためて学びなおした社会人からの申請に基づき、資格認定機構が、その内容を審査し、資格を授与するものです。

考古調査士資格を運営する「考古調査士資格認定機構」(は考古学専攻(コース)をもつ加盟大学によって構成されており、埋蔵文化財調査の実務を社会に広く伝え、社会の理解を得るとともに、透明性のある考古調査士資格を発行することによって、埋蔵文化財調査の実務に携わる人々の意識の向上や、社会的地位の保全・向上を目的としています。



考古調査士資格認定機構のホームページ <http://www.jabar.jp/>

# 考古調査士資格 の種類

## ■ 2級考古調査士(学部コース)

遺跡の発掘調査における調査補助員、あるいは発掘調査時の諸作業で、調査担当者を補佐することができるものと認められ、技術的には遺構の発掘と、記録保存における遺構測量や細部測量、作図、写真撮影などの業務を遂行することができるものとされています。また整理作業において、図面整理作業や遺物の実測作業などを担当でき、報告書の作成においては、事実記載の一部を執筆できると認められることも必要です。

学部開設された指定科目群の中から、3群以上・5科目以上を修得することが必要です。國學院大學で資格を修得する場合、史学展開演習・考古学調査法は必修、文化財調査法も修得することが望ましいものとしています。

## ■ 1級考古調査士(大学院コース)

遺跡の発掘調査において、主体的に調査に関わり、安全管理や衛生管理をはじめ発掘調査の全工程において現場を統括し、関係機関との調整などの実務も担当でき、また報告書の執筆や編集において、主体的に総括できると認められるものとされています。

大学院に開設された指定科目群の中から2・5群の各1科目を含めて4科目8単位以上の単位修得が条件となります。また、2級資格を取得もしくは2級資格相当の単位を修得済みであることが必要です。

## ■ 上級考古調査士

「上級考古調査士」は発掘調査の全体的企画策定ができる人材養成のための経験者を対象とした社会人課程のうち「マネジメント・コース」を履修した人に認定される資格で、國學院大學では現在のところ開講していません。

必要な単位を修得した場合は、各自で、申請書・成績証明書を考古調査士資格認定機構に提出し、審査料を支払うことにより、審査を経て資格が認定されます。認定科目の単位を修得していれば3年次修了時に申請することも可能です。

# 資格申請の 手続き

## 考古調査士資格の指定科目

### 第1科目群 考古学の概説

特定の時代、地域に限定せず、幅広く世界の地域や時代にわたって、原始文化や古代文明などについて概説する分野です。國學院大學では「考古学概論Ⅰ」で、考古学の歴史・方法・考古学から復元される各時代の概要を学びます。

### 第2科目群 考古学の基礎的方法論を扱う科目群

考古学の研究、調査分野では地域や時代を越えた共通の方法論があります。國學院大學では、1年次より演習での発表を行い、その方法論を学びます。本学での指定科目は3年次の「史学展開演習(考古学)」と、大学院の演習科目です。

### 第3科目群 考古学の個別分野を特論的に扱う科目群

日本の先史考古学、あるいは歴史考古学、中国など世界の一地域に特化した研究、あるいは環境、自然遺物などの分野、特定の学術的課題に焦点を絞り、特論的に扱う分野です。國學院大學指定科目の「考古学各論Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ」および「歴史考古学Ⅰ」はそれぞれ、主として縄文時代、弥生時代、古墳時代、歴史時代について詳しく学ぶ講義です。大学院では、「考古学特論A」「日本考古学特論A」「外国考古学特論A」「環境考古学特論A」を指定しています。

### 第4科目群 考古学調査の技術的実習分野

各種の測量技術や機器の操作法をはじめ、発掘調査に必要な知識や技術、また遺物などを実測などにより資料化し、適切な整理作業を通じて調査成果を発掘報告書にまとめあげる技術を習得する分野です。國學院大學では夏休みの10日間、先輩・後輩とともに合宿しながら実際に遺跡を発掘し、本格的な写真撮影やパソコンを使った資料整理を行いながら、報告書を作成、出版する「考古学調査法」を開講しています。

### 第5科目群 埋蔵文化財を扱う科目群

埋蔵文化財の保存と活用に関する科目群で、文化財保護法などの諸法規や理念と、実際の運用、具体的な調査法などについて学ぶ分野です。國學院大學では「文化財調査法」と大学院の「文化財学特論A」を設けています。

### 第6科目群 文化財科学を扱う科目群

埋蔵文化財の調査と研究、活用するにあたって必要となる自然科学を学ぶ分野。自然遺物の同定、埋蔵文化財の産地推定・年代測定・三次元計測といった理化学的分析、地中探査・古環境の復元・GISといった情報システム、あるいは保存科学や修復技術等に関わる科目群です。國學院大學では「考古科学Ⅰ」「考古技術学Ⅰ」を指定科目としています。



# 考古調査士資格と教員免許・博物館学芸員資格を修得する履修モデル

ここに示したのは1つのモデルです。実際の履修にあたっては、必ず『履修要綱』を参照のこと。

		1年	2年	3年	4年
<b>必修科目</b> 28単位		史学入門Ⅰ(2) 史学入門Ⅱ(2) 史学基礎演習A(2) 史学基礎演習B(2)	史学展開演習(考古学)(4)★	史学展開演習(考古学)(4)★	史学応用演習(考古学)(4)★
		<b>1群</b>	<b>2群(必修)</b>	演習・卒業論文(8)	
<b>専門科目</b> 36単位	<b>選択必修</b> (8)	考古学概論Ⅰ(2)☆ 考古学概論Ⅱ(2)☆	西洋史概論Ⅰ(2)★ 東洋史概論Ⅰ(2)★	<b>4群(必修)</b>	
	<b>専門選択</b> (選択Ⅰ類) (16)	考古学各論Ⅰ(2) 考古学各論Ⅱ(2)	考古学調査法(4) 考古学各論Ⅲ(2) 考古学各論Ⅴ(2)	史学特殊講義(2) 史学特殊講義(2)	
	<b>自由選択</b> (12)		考古学各論Ⅳ(2) 考古学各論Ⅵ(2)	外国考古学Ⅰ(2) 外国考古学Ⅱ(2) 自然地理学Ⅰ(2)★ 人文地理学Ⅰ(2)★	
<b>3群</b>					
<b>全学オープン科目</b> 24単位		日本史概論Ⅰ(2)★ 日本史概論Ⅱ(2)★	歴史考古学Ⅰ(2) 歴史考古学Ⅱ(2) 文化財調査法(4) 日本時代史Ⅰ(2)★ 神道考古学Ⅰ(2) 東洋史概論Ⅱ(2)★ 西洋史概論Ⅱ(2)★	考古科学Ⅰ(2) 考古科学Ⅱ(2) 考古技術学Ⅰ(2) 考古技術学Ⅱ(2) 文化人類学Ⅰ(2)☆ 文化人類学Ⅱ(2)☆	地誌学Ⅰ(2)★
<b>5群(準必修)</b>				<b>6群</b>	

★は教職課程の必修・選択科目、☆は博物館学課程の選択科目

このほかに教養総合科目(36単位)および教職・博物館学の単位が必要です。

考古調査士資格に必要な科目は考古学を専攻して卒業する場合、一般的に修得する科目です。

## 伝統ある 國學院の 考古学

國學院大學の考古学は、大学の前身の皇典講究所における明治43年の坪井正五郎による「人類学」の講義や、翌年に開設された高橋健自による「考古学」の講義まで遡ります。また、大正12年には鳥居龍蔵が教授に就任し、15年に上代文化研究会(現在の考古学会)を設立して多くの学徒を育てました。上代文化研究会の学生の拠点となったのが、昭和2年に樋口清之によって開設された考古学標本室(現在の学術資料館)です。戦後、大場磐雄によって正式に考古学専攻が設置され、昭和54年には考古学実習がはじまりました。これまでに、全国に文化財担当職員、博物館学芸員、地歴・社会科教員を多数送り出しています。

本学は、多数の発掘調査報告書を配架した図書館、各時代の実物資料を収蔵・展示している資料館を擁しており、各分野の講師を招いて、日本や東アジアの考古学を中心に幅広い分野で教育・研究を展開しています。特に縄文文化とその成りたち、神社や祭祀儀礼の考古学的研究などは、本学の特色ある研究分野として知られています。

本学は、多数の発掘調査報告書を配架した図書館、各時代の実物資料を収蔵・展示している資料館を擁しており、各分野の講師を招いて、日本や東アジアの考古学を中心に幅広い分野で教育・研究を展開しています。特に縄文文化とその成りたち、神社や祭祀儀礼の考古学的研究などは、本学の特色ある研究分野として知られています。



### 考古学を 詳しく学ぶには

考古学は実際に遺跡を発掘し、遺物を手にとって観察することが研究のスタートになります。授業だけでは飽き足りない諸君は、各地の展覧会や研究会や発掘の整理の現場に行ってみましょう。考古学実習室ではそうした情報を紹介しています。考古学会や考古学研究会に参加して先輩や仲間とともに研鑽を積むのもいいでしょう。